

Mon Nara



Numéro280 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会 MARS—AVRIL 2017 3—4 月合併号

奈良県国際交流員ジャンヌ・オストリーさんを迎えて

「第134回フランス・アラカルト」開催 (3/9)

中世騎士の話ということで、講師はどんな厳めしい方かと思えば、若い女性のジャンヌ・オストリーさん。パリ郊外ヴァンセンヌの森近くのお生まれで、幼少のころ一度東京に住まれたこともあるとのこと。現在はパリ政治学院公共政策専攻在籍中で、奈良県庁で国際交流員として勤務されています。奈良教育大学留学生のダミアン・ゲニューさんも交え18名が参加しました。中世の騎士について、文学上の理想像と歴史上の実像の二つの視点から、次のようにお話いただきました。



「湖の騎士ランスロ」13世紀
フランス国立図書館所蔵

騎士の登場する文学作品には、英雄的存在としての騎士を描いた『ロランの歌』や、騎士の恋をテーマとした『トリスタンとイゾー』、クレティアン・ド・トロアのアーサー王騎士小説があります。『トリスタンとイゾー』では、主君への忠誠と恋との板挟みの悲劇、クレティアンの『獅子の騎士』、『荷車の騎士』の二作品では宮廷恋愛が描かれていますが、クレティアンは不義の恋よりは正式な婚姻を大切に考えていたようです。歴史上の騎士は、1000年ごろ、聖職者、戦士、労働者という社会の3つの身分の分化と同時に現れてきたもので、軍事技術の優位や武器の独占によって一種の支配階層として誕生しました。シャルルマーニュの死後、中心的権力が弱くなったことが、封建的システムの台頭を促しましたが、それは領主と臣下の間の主従関係がピラミッド型に積み重なって、最終的には王が頂点に立つというシステムでした。教会は、本来は武力を否定する立場でしたが、騎士叙任の式典に教会



「騎士の叙任式：福音書にかけた誓い」
14世紀 フランス国立図書館所蔵

の存在理由を見出す一方、「神の平和」の運動を広めようと努力しました。しかし、十字軍の運動が始まると、教会は率先して参加を呼び掛け教会が騎士を派遣するようになりました。結論としては、文学上の騎士と歴史上の騎士は明かに異なる存在ですが、深いところで影響しあっているということです。また中世の騎士のイメージは、第一次大戦での飛行士の騎士的振舞いや、映画テレビのアーサー王物語など現代にも大きな影響を与えています。

お話の後、全員でビストロ・ルノールのお菓子をシェフ北田さんの説明つきで味わい、質疑応答が行われました。日本の武士道と西洋の騎士道の違いは？ ジャンヌさんは武士は勝敗にこだわり騎士は理想を求めるのではと答え、特別

参加のダミアンさんは武士の方が精神的と、同じフランス人でも答えが微妙に異なったのが面白いところです。フランス人が女性に優しいのは騎士道と関係あるのか？ という質問に対して、ルイ14世の宮廷で育まれた文化の影響があるかも知れないとのこと。他にも騎士物語はどんな場で享受されたのか？ フランス本国でもドン・キホーテのように騎士が諷刺の対象になることもあるのか？ 現代のフランスの若者は騎士をどう思っているか？ など、ここに書ききれないほど、熱心なやり取りがあり、活発な日仏交流の場が持てたと思います。これをきっかけに、クレティアン『荷車の騎士』なども読んでみたいと思いました。(杉谷健治)



会員の皆様の質問や探究心に感謝！

Jeanne Austrey

J'ai été ravie de participer à la présentation « A la carte » de ce mois. Ce fut une opportunité rare de parler et d'étudier un sujet qui m'intéresse. Les questions et la curiosité des membres de l'association ont permis un échange riche et profond. Je souhaite remercier les membres de l'association pour m'avoir offert cette chance. J'espère pouvoir revenir !

今月の「アラカルト」で発表者として参加することができて、とても嬉しいです。というのも、私の関心のあるテーマについて話をして理解を深める機会は、あまりありませんので。奈良日仏協会の会員のみなさまの質問や探究心のおかげで、とても豊かで奥の深い交流をすることができました。このような機会を与えてくださった皆様に感謝するとともに、またこのような機会がもてることを願っています。(ジャンヌ・オストリー)

フランス文学の庭から <50> 名句の花束

三野博司（会長）

Ses charmes surpassaient tout ce qu'on peut décrire. (1)

彼女の魅力は描きうるすべてを越えていた。

(アベ・プレヴォー『マノン・レスコー』 1731 年)

「名句の花束」も第 50 回となりました。2009 年、当時の Mon Nara 編集担当者から、記事が集まらないので誌面を埋めるために何か書いてほしいと頼まれたのがことの始まりです。以来、一度も休載することなく続いています。今では、Mon Nara は様変わりして、毎号記事が満載。そのなかで 1 頁のスペースを頂戴するのは肩身が狭いと感じるほどに、各頁に読み応えのある文章が並んでいます。この充実した誌面の背後には、代々の編集担当者の隠れた努力があることを強調しておきたいと思います。

一貫した方針もなく書き綴ってきた連載エッセイですが、このところはオペラになったフランス文学の名作を取り上げています。今回は、マスネやプッチーニのオペラで有名な『マノン・レスコー』です。原作であるアベ・プレヴォー（Abbé Prévost 1697-1763）の小説は、二つのオペラより 150 年も前に書かれた小説です。アベという名の通り、彼は修道士となりますが、修道院生活中から、連作『ある貴人の回想録』を執筆します。1731 年、その第 7 巻として、ロンドン滞在中に『騎士デ・グリユーとマノン・レスコーの実話』を書き、この一作で文学史に名を留めました。わずか 1～2 週間で執筆されたと言われています。

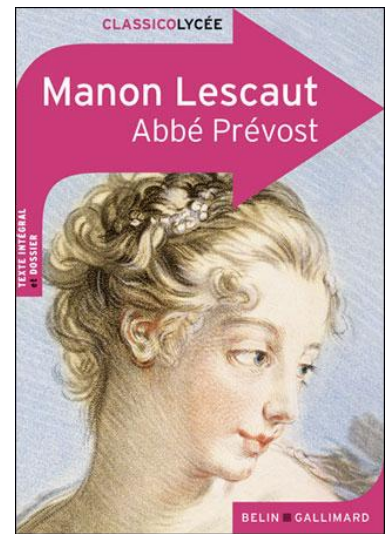
まず語り手は、パシーで騎士デ・グリユーとマノンの二人に出会います。次に会うのは、2 年後カレーですが、今度はデ・グリユーひとりだけです。実はこの間に二人はアメリカへ渡り、そこでマノンが死んでいるのです。そして、デ・グリユーが、マノンとの出会いから悲劇的な結末までを話し始めます。語り手は、それに一行たりとも付加することなく、ここに記すのだと言います。18 世紀の小説によく用いられた入れ子構造ですが、前回紹介した 19 世紀の作品である『カルメン』も同じ構造であることに気づかれたでしょうか。

始めにデ・グリユーは、語り手に言います。「私はあまりにも彼女を熱烈に愛しているため、あらゆる男の中でいちばん不幸な人間になったのです。Je l'aime avec une passion si violente qu'elle me rend le plus infortuné de tous les hommes.」これがデ・グリユーの物語をみごとに要約しています。以下に語られるのは、他に類を見ない「情熱」の異常なまでの激しさ、そして倦むことなく繰り返される恋ゆえの愚行、その結果次々と降りかかってくる不幸の連続です。マスネも、プッチーニも、この情念の奔流の物語をオペラにしたのです。デ・グリユーとマノンの最初の出会いはアミアンです。初心な若者であった彼が、少女のマノンに出会い、たちまち恋のとりこになってしまいます。この一目ぼれの瞬間から、彼はマノンを「とても魅力的 si charmante」と語り、以後「美しい」「魅力的」という言葉をいくたびも繰り返します。とはいえ、どこが、どのように魅力的なのか、マノンの身体的特徴について彼はほとんど語りません。

名句に取り上げたのは、パリのサン＝シュルピス教会での再会の場面。デ・グリユーはこう語ります。「Ses charmes surpassaient tout ce qu'on peut décrire.」これをあっさりと「この世ならぬ美しさだった」（青柳瑞穂訳）と

訳しているものもありますが、きっちり訳すと、「彼女の魅力は描きうるすべてを越えていた」となるでしょう。恋に盲目のデ・グリユーには、マノンの魅力を客観的に描く余裕などないのです。彼は、その美を崇拝するだけです。「お前は神様の作った人間としてはあまりにもすばらしい Tu es trop adorable pour une créature.」。彼にとって、マノンは créature つまり神が作った人間以上のものなのです。読者のほうとしても、デ・グリユーが具体的に語ってくれないマノンの魅力を、ただこの世ならぬ美として受け入れるしかありません。

（以下次号）



在京都フランス総領事ボネルさんとの面談報告

2月21日とても寒い日、奈良市中部公民館でボネル総領事をお迎えしました。放送大学学習センターの方へ間違ってしまうというハプニングがありましたが、2時ごろから約40分、先方は総領事と北川秘書、当方は三野会長と杉谷で、フランス語と日本語も交えながら、いろいろと情報交換することができました。ジャン・マチュー・ボネル (Jean-Matthieu Bonnel) 総領事は、前のブロッソー総領事の後を受けて、昨年9月に着任され、3年間勤務の予定とのこと。

慶応大学への交換留学、大使館勤務とこれまで何度か日本に住まれており、奈良にも何回か来られたとのことでした。京都での最近の催し「夜想記念日 思想のタベ (LA NUIT DES IDÉES)」などの活動についてお話しいただきました。当方からは、これまでの大使や総領事とのお付き合いの内容や「フランス・アラカルト」など事業活動について説明しました。春秋シーズンは忙しくてあちこち足を運べないと嘆かれていましたが、奈良にも折々お越しいただき、今後、事業の面でも少しずつ交流ができればと思います。(杉谷健治)

在京都フランス総領事主催「グー・ド・フランス」参加報告

2015年より、3月21日をフランス外交の一つであるフレンチ・ディナーの日と定め、全世界でフランスの美食文化を顕揚する行事が開催されています。3回目にあたる今年、ジャン・マチュー・ボネル在京都フランス総領事の主催による夕食会が、京都先斗町にある格式高いレストラン「禊川」において開催されました。招待を受けたのは、飯塚保江 (岐阜)、三好郁朗 (京都)、安福幸雄 (神戸)、白井智子 (姫路)、佐藤理 (岡山) の各日仏協会会長、および在広島フランス名誉領事の望月公正氏、そして三野の7名でした。鴨川に面した眺めの良い部屋で、ときどき京都テレビの撮影班が入室し、総領事による「グー・ド・フランス」および日仏の文化についての興味深い話を聞き、一流の料理を味わうというたいへん贅沢なひとときを過ごしました。各地の日仏協会会長とも再会し、あるいは今回新たに知己を得て、貴重な情報交換ができました。(三野博司)



Nos amis francophones à Nara (9) Damien GAIGNEUX さん



"Etudiant en Japonais à l'Université Lyon 3 Jean Moulin, l'opportunité m'a été donnée de venir achever ma dernière année de licence ici même au Japon. J'étudie donc actuellement à l'Université d'Education de Nara et réside dans le charmant quartier de Takabatake. Comme vous pouvez l'imaginer le principal intérêt d'un échange linguistique à l'étranger est bien évidemment de pouvoir s'immerger dans le quotidien du pays et de ce fait, dans sa langue. Bien loin des manuels scolaires et autres méthodes pédagogiques, j'ai pu ainsi découvrir la Langue réelle, le Japonais de la rue, celui des jeunes et des anciens. La particularité linguistique qui à mon sens frappera le plus l'oreille du Français ici est ce qu'on appelle les Giongo, ces onomatopées propres à la langue Japonaise.

Si dans la Langue Française les onomatopées restent peu ou prou cloisonnées à l'univers de la bande dessinée, on peut entendre ici quotidiennement ces adverbess à la consonance si amusante au fil de chaque conversation. Les chevelures des demoiselles s'ébouriffent au vent en faisant "bosabosa", la carrosserie de la berline flambant neuve tournant au coin de la rue scintille en faisant "pikapika", le vieux canapé décrépi s'étiole en faisant "boroboro"... Les exemples sont innombrables et ainsi chaque jour ou presque l'on peut entendre un giongo jusqu'alors inconnu à nos oreilles, s'ajoutant à la longue liste de ceux qui nous étaient déjà familiers. On a coutume de dire que l'apprentissage d'une Langue est sans fin, et celui du Japonais est sans aucun doute un continuel émerveillement, un stimulant voyage qui met les esprits en ébullition en faisant "wakuwaku", pourrait-on dire."

(抄訳) 私はジャン・ムーラン・リヨン第三大学で日本語を専攻する学生です。学士過程の最終学年を日本で履修するために、奈良教育大学に留学しています。今は、奈良市内の高畑町の趣のある街並みで暮らしています。海外留学の最も大きなメリットは、その国の生活の中に入り込み、言葉を直に体験できることです。若い人からお年寄りまで、いろいろな人が使う生きた本物の言葉、“街角の日本語”を日々発見しています。フランス人の耳に特に印象深く響くのは、日本語の特徴でもある“擬音語”ではないかと思います。

擬音語のことをフランス語ではオノマトペと言いますが、フランスでは漫画の中で使われているのを見かける程度です。しかし、日本では、この擬音語が音の響きを巧みに利用しながら表現の豊かさを生む言葉として、日常的に会話の中で使われています。例えば、風に吹かれた女性の髪は、“ボサボサ”に乱れてしまいますし、真新しいフォード・セダンの車は“ピカピカ”にきらめいて交差点を曲がっていきます。古ぼけたソファなら“ボロボロ”に傷んでしまったと言われるでしょう。このような例は枚挙にいとまがありません。毎日と言っていいほど、新しい擬音語が私の耳に飛び込んできて、擬音語のリストに付け加えられていきます。言葉の習得には終わりがなくよく言われますが、日本語の習得は、日々、驚嘆の連続で、刺激に満ちた旅のようなものです。そして、この旅は、今まさに、私の心を“ワクワク”興奮させてくれているのです。(ダミアン・ゲニュー)

ガイドクラブからのお知らせ：今年の秋は「大神神社」へ

「浄瑠璃寺」(2015)「当麻寺」(2016)に続いて、2017年度は「大神（おおみわ）神社」について、日本語とフランス語で紹介できることが目標です。9月16日（土）に勉強会、10月14日（土）に散策と清酒「三諸杉」の「利き酒体験」を予定しています。大神神社に関連することを、これから Mon Nara で毎号少しずつ紹介していきます。

Nous pourrions parler ensemble du sanctuaire Ômiwa-jinja lors de la session du club de guide le 16 septembre et le visiter le 14 Octobre ! Ce jour-là, on pourra aussi déguster du saké dans la cave de « Mimurosugi » !

1) 「山」が御神体

大神神社は奈良県でも特別な場所の一つであり、日本でも最も古い神社の一つです。古くからの神道の伝統によれば、神社には本殿（神殿）がなく三輪山自体が「御神体」と考えられているという事が、そのことを証しています。

Le sanctuaire Ômiwa-jinja est l'un des nombreux lieux exceptionnels que compte la préfecture de Nara. C'est l'un des plus anciens sanctuaires du Japon, en témoigne le fait que, selon la tradition du shintô ancien, le Mont Miwa-yama lui-même est considéré comme « Corps de kami » *goshintai*, le sanctuaire n'ayant par conséquent pas de pavillon principal *honden* (ou *shinden*).



2) 酒造りの神様

この神社の神さまは、とりわけ酒造業者を守護する神さまです。三輪山は、古来から「三諸山（みむろやま）」と呼ばれ、「うま酒みむろの山」と称され、酒の神様としての信仰からの呼び名であると言われています。毎年 11月14日には大神神社に全国中から蔵元・杜氏（とうじ）が集まり「醸造祈願祭（酒まつり）」が行われています。

La divinité de ce sanctuaire est notamment la divinité tutélaire des brasseurs de saké ! Le « Mont Miwa-yama » est également appelé depuis les temps anciens le « Mont Mimuro-yama » ou le « Mont Mimuro au savoureux saké ». On dit que ce nom vient de la croyance de la divinité du saké. Chaque année, le 14 novembre, les brasseurs et brasseries de tout le pays se réunissent au sanctuaire Ômiwa-jinja pour la fête du saké : « Jôzô-kigan-sai ».

大物主大神（おおものぬしのおおかみ）を厚く敬った崇神（すじん）天皇は神に捧げる御酒を造るために、高橋 邑の活日（いくひ）を掌酒（さかひと）に任じました。活日は酒造りの杜氏の祖先にあたります。そして活日は一夜にして美酒を醸（かも）したと伝わっています。崇神（すじん）天皇 8 年冬 12 月卯の日に、大神への祭りが行われた後の酒宴で、活日は御酒を天皇に捧げて次の歌を詠みました。

L'empereur Sujin, afin de fabriquer l'Alcool qu'il offrirait à Ômononushi-no-ôkami (le Grand Supérieur Grand Maître des Choses) qu'il vénérât profondément, nomma Ikuhi du village de Takahashi ministre de l'alcool. Ikuhi est considéré comme le premier ancêtre des maîtres brasseurs de saké. Selon la légende, Ikuhi produisit en une seule nuit un savoureux saké. En hiver, le jour du lapin du 12^{ème} mois de la 8^{ème} année du règne de l'empereur Sujin (en 211), lors du banquet qui suivit les célébrations dédiées au Grand Supérieur, Ikuhi offrant l'Alcool à l'empereur, composa le poème suivant :

この神酒は 我が神酒ならず 倭なす 大物主の 醸みし神酒 幾久 幾久	この神酒は わたしが造った神酒ではありません。 倭の国を お造りになった大物主大神が 醸されたお酒です。 幾世までも久しく（栄えませ、栄えませ）。	Cet alcool sacré N'est pas le mien Le fondateur du Yamato Le Grand Maître des choses A brassé cet alcool sacré (Qu'il prospère) Pour des siècles et des siècles
---	--	--



崇神天皇と群臣（ぐんしん）は夜もすがら酒を酌み交わし、祭りの宴を楽しみました。この故実によりご祭神は酒造りの神として敬われるようになったとされます。三輪の地は美酒を産み出す酒どころとして、人々によく知られていたのでしょう。三輪の枕詞は「味酒（うまさけ）」で、額田王（ぬかたのおおきみ）の歌をはじめ「味酒の三輪」は万葉集にも詠まれました。

L'empereur Sujin et ses vassaux burent du saké toute la nuit et profitèrent du banquet des festivités. C'est de ce fait paraît-il que cette divinité fut ensuite vénérée comme la divinité du brassage du saké. Les gens savaient sans doute que Miwa était une région produisant un délicieux saké. En poésie japonaise, le terme *umasake* (« savoureux saké ») fait référence à Miwa avec en tout premier lieu un poème de la princesse Nukata no Ôkimi dans le Man'yô-shû où l'on peut lire : « Miwa au savoureux saké » (*umasake no miwa*).

※日本語の案内と写真は「三輪明神大神神社 HP」を参照・一部転載。仏訳は Pierre Régner さんによる。

フランス各地方の伝統菓子 (1) 「ノルマンディー」 (Normandie)

フランスの地方を旅すると、パリでは見ることのないお菓子に出会うことができます。それらは独自の風土、歴史そして文化に根ざした、その土地の人々に愛され続けているお菓子たちです。

今回ご紹介させていただくのは北西フランス『ノルマンディー』。

ノルマンディーは温暖な気候に恵まれ、小麦や果物の栽培、酪農が盛んで農業国のリッチな食事情を実感できます。

牧草がよく育つため、牛が多く、良質なバターやカマンベール、リヴァロ、ボンレベックなどのチーズが豊富に生産されています。

牧場がそここにあり、バスを降りて間近でみるノルマンディー種の牛のうなり声の大きさはびっくりしますが、リンゴや洋ナシの木が一般家庭の庭にもあって、赤いリンゴが落ちていたり。

お菓子ではリンゴや洋ナシのドライフルーツ、豊富な生クリームから作られるノルマンディキャラメル、リンゴを丸ごとパイ生地で包んで焼いたドゥイヨン、リンゴの芯を抜いて中にバターを入れて焼いたポム・オ・フー等。その他、ノルマンディーにはビオの朝市、農家レストラン、シードル、カルヴァドスなどの工房やキャラメル工場など、豊かな食文化を満喫出来るところがたくさんあります。機会があればぜひ訪れていただきたいと思います。(柳谷安以子)



フランス産チーズの紹介 (5) 「ブロッチュ」 (Brocciu / Broccio)

地中海に浮かぶ島、コルシカ島。ナポレオンの生地としても有名です。“イル・ド・ボーテ”とフランス人が呼ぶこの美しい島の今ならでは旬のフレッシュチーズ、「ブロッチュ」のお話です。原料はこの時期出産を迎える羊や山羊のミルク、またはこれらのミックスです。ナポレオンの母が大好きで、ナポレオンはこのブロッチュを、故郷を恋しがる母に食べさせたいがために、パリへ羊を連れてきてつくらせたというエピソードもあります。このブロッチュ、原料がミルクそのものではなく、ミルクからチーズを作る際に出る水分(ホエー)で、このホエーを加熱し出来るものだから、これをチーズと呼ぶのか、一時物議をかもしたようです。(現在は無事 AOC 取得済みです)。

ざるのような容器に入っていて、見た目は豆腐のよう。ミルクの優しい味わいが口いっぱいに広がります。鮮度が命のフレッシュチーズなので日本ではあまりお目にかかることはできませんが、現地のマルシェへ行くとか出来立ての、湯気が立っている温かいものを食べることができます。そのままいただくのもいいですが、ジャムやオリーブオイルに塩をつけても美味しく、現地では砂糖とマールをかけて食べるのが大道の食べ方だそう。またオムレツやケーキなどお料理・お菓子づくりにも大活躍のチーズです。ミルクを余すことなく活用する乳文化のある国ならではのチーズ。コルシカ島を訪れる時は、ぜひ食べてみたいものです。(法人会員 ビストロ ルノール 北田由佳)



料理講座「サロン ルノール」の案内



★ベーシックなフランス家庭料理から本格フランス料理まで、解りやすさをモットーに解説と実演をいたします。出来上がった料理は試食していただきます。実習はありませんので、ランチのおつもりで気軽にご参加下さい。22年の経験に基づいて、他では教わらない大事なポイントをレクチャーいたします。一回完結ですのでご都合のいい回だけの受講が可能です。(北田浩久)

★開講日：毎月第3水曜日(8月と12月は休講) ★時間：11時～13時 ★会場：ビストロルノール

★会費：3500円(日仏協会会員様は3300円) ★ご予約、お問い合わせはお電話にてお願い致します。tel. 0743-75-9555

文化講座「ジャメ先生と漱石の《俳句》を訳す」の案内

★2017年度は漱石・子規生誕150周年にちなんで、漱石の俳句のフランス語訳に挑戦します。★会場・連絡先：講座表参照

★講師：オリヴィエ・ジャメ、浅井直子 ★教材：毎回テキスト配布、岩波文庫『漱石俳句集』

第1回 5/27 俳句事始め～子規との出会い：「帰ふと泣かずに笑へ時鳥」「聞かふとて誰も待たぬに時鳥」他(漱石 22歳)

第2回 6/24 松山・熊本時代：「長けれど何の糸瓜とさがりけり」「木瓜咲くや漱石拙を守るべく」他(29～33歳)

第3回 7/22 ロンドン留学時代：「絵所を栗焼く人に尋ねけり」「見付けたる堇の花や夕明り」他(34～36歳)

第4回 10/28 修善寺大患期：「秋の江に打ち込む杭の響かな」「生き返るわれ嬉しさよ菊の秋」他(43歳)

第5回 11/25 大正期：「白き皿に絵の具を溶けば春浅し」「秋立つや一巻の書の読み残し」他(45～49歳)

「仏検」2017年度春季試験 実用フランス語技能検定試験 申込受付中！

◆1次試験 2017年6月18日(日)(1・2・準2・3・4・5級) ◆2次試験 2017年7月16日(日)(1級・2級・準2級の1次合格者対象) ◆申込受付期間(郵送)：2017年4月1日(土)～5月17日(水)消印有効(インターネット)：2017年4月1日(土)～5月24日(水)23:59まで ◆試験会場：奈良女子大学他

◆「仏検」は文科省および在日フランス大使館の後援を受け、公益財団法人フランス語教育振興協会が実施するフランス語の検定試験です。日本で広く認められた認定資格として、大学の単位修得や編入学試験の資格認定の条件にもなっています。

第43回シネクラブ例会(2/26) 報告

◆はじめて観るサッシャ・ギトリ監督作品『とらんぶ譚』(1936)。脚本、主演、それに全篇のナレーションまで本人がこなしているのです。じつに面白い映画でした。原題は *Le roman d'un tricheur* (あるペテン師の物語) で、ほとんど民話のような昔々の一銭銅貨とキノコの事件から回想がスタートし、サッシャ・ギトリの野太い声に乗って人は自由にとことん活躍し、事は意表をつきつつ面白い方向へとずんずん運ぶ愉快さは、フランス版講談とでもいう芸当です。ギトリの吐く煙は指まで臭くなるカポラル煙草か？ ホテルの壁をぶち抜いて宝石を攫う作戦も大成功、入れ替わり立ち替わりいろんなオトナを登場させて、観客を煙に巻きながら生き生きと動かす手練手管。登場人物は語らない代わりに表情がすばらしい。兵隊がたむろするホールでの一曲も印象的。淫売のおかみを演じたのはシャンソン歌手フレール(Fréhel)。YouTube でさがし出したその歌は、*Et V'Là Pourquoi* でした。辛辣な風刺もきいた傑作で、他の作品も観てみたいです。(大内隆一)

◆昨年度のシネクラブで、戯曲を原作にしたアラン・レネ 80~90 歳頃の監督作品の実力俳優たちの繰り広げる頓智とエスプリのきいた軽妙な会話劇を堪能した後、今回、その70余年前に製作されたギトリの作品を見て、どこか親近性が感じられた。後から、レネのコメント「劇場ではじめて『とらんぶ譚』を観た時は、多くの演出家がそうであったように、嬉しさで飛び跳ねてしまった。自分の作品の中に彼の影響が垣間見えたとしたらとても光栄なことだ…」を見つけて、嬉しくなった。『とらんぶ譚』はじっさい誰が見ても面白い。が、その面白さについて考え始めると、映画の根底にひねりのきいた洞察があるようで、映画作りの技法もなかなか手がこんでいて、手ごわいと思う。どこかはったりで「子供だまし」などところを感じつつも、映画の原点の魅力にみちあふれた作品を作りだす茶目気のある怪物のような監督には、やはり敬服してしまう。こうして「しかし」「とはいえ」「それでも」「さらには」等々の接続詞とともに、今も感想が増殖していく単純かつ複雑で古くて新しいギトリの映画。これからも、いろんな観客・演出家・芸術家たちを楽しませ、刺激していくことだろう。(浅井直子)



第44回 奈良日仏協会シネクラブ例会(6/25) 案内

★6月25日(日) 13:30~17:00 ★奈良市西部

公民館5階第4講座室(予定) ★プログラム: サッシャ・ギトリ監督『夢を見ましょう』(*Faisons un rêve*, 2009年, 104分)

★参加費: 会員無料、一般300円 ★飲み会: 例会終了後「味楽座」にて ★問合わせ: Nasai206@gmail.com (予約不要)

★En cette année 1936 et sous l'influence de sa jeune épouse Jacqueline Delubac, Sacha Guitry trouve enfin ses marques dans le cinéma pour lequel il se sera montré si méfiant auparavant. Il s'avérera aussi prolifique qu'au théâtre en signant quatre films comptant parmi ses plus grandes réussites, tous adaptés de ses pièces: *Le Nouveau Testament*, *Le Roman d'un tricheur*, *Mon père avait raison* et *Faisons un rêve*. Ce dernier transpose justement une pièce écrite en 1916. Si notamment *Le Roman d'un tricheur* avait témoigné pour Guitry d'une certaine jubilation à exploiter toutes les possibilités narratives et visuelles de l'outil cinématographique, *Faisons un rêve* revient à une influence plus typiquement théâtrale. Sur le papier on a un triangle amoureux de boulevard femme/amant/mari assez typique et le film est une célébration du verbe virtuose de Guitry à la mise en scène assez statique. Passé un prologue mondain où l'on croise du beau monde au casting (Arletty, Michel Simon...), le récit se resserre pour un brillant jeu de dupe sur le couple. Ce sera d'abord celui du couple légitime du mari (Raimu) et de la femme (Jacqueline Delubac). Venu rendre visite à leur ami avocat (Sacha Guitry) absent, l'époux et sa femme par leurs réactions et dialogues à double-sens laissent deviner leurs infidélités imminentes ou possibles dans un brillant échange. La bonhomie et la truculence de Raimu font merveille face à l'élégante malice de Jacqueline Delubac. (...) (Pierre Silvestri)

(抄訳) サッシャ・ギトリは1936年、彼の若き妻ジャクリヌ・ドリュバックの影響下、それまで信用していなかった映画に自分の場を見出した。やがて演劇と同様映画においても多くの作品を産み出すことになる。成功をおさめた作品4本『新たな遺言』『とらんぶ譚』『私の父は正しかった』『夢を見ましょう』は、すべて彼の戯曲からの翻案である。『夢を見ましょう』は、1916年に書かれた劇を移し替えた作品。『とらんぶ譚』が、ギトリにとって映画の手法のあらゆる語りや視覚の可能性をきわめる喜びを示した作品であるとするなら、『夢を見ましょう』はより演劇らしい演劇の影響に回帰している。基本的には、妻・愛人・夫の典型的な愛の三角関係の風俗喜劇で、映画は動きの少ない演出における言葉の達人ギトリの腕の見せ所となる。(アルレッティ、ミッシェル・シモン)の) 有名人をキャストにした社交場のプロローグを経て、物語は夫婦のだまし合いの会話に集約される。まずは夫(レミュ)と妻(ドリュバック)の夫婦の会話のやりとりがある。夫婦は友人の弁護士(ギトリ)を訪ねてくるが彼は不在、そこでの夫婦の反応と会話は二重の意味を含み、夫と妻それぞれ目前に迫る、ないしは起こり得る浮気を、絶妙の言葉の応酬で観客に推測させる。レミュの陽気なあけすけさ、それに対するドリュバックの気の効いた揶揄は、効果抜群である。(…)

(ビエール・シルヴェストリ) ※スペースの関係で、続きはHPに掲載します。



《フランス映画の現在》(Actualité du cinéma français)

◆3月25日~31日、第20回「カイエ・デュ・シネマ週間 in 関西」(アンスティチュ・フランセ東京後援)の上映会が、京都シネマと大阪のシネ・ヌーヴォにて開催されました。今年はアラン・ギロディ(Alain Guiraudie)監督が来日。2013年の衝撃作『湖の見知らぬ男』(*L'Inconnu du lac*)、最新作『垂直のまま』(*Rester vertical*)の上映後、観客との質疑応答がなされました。

◆6月22日(木)~25日(日)、第25回「フランス映画祭2017」。会場: 有楽町朝日ホール、TOHOシネマズ日劇他。団長女優カトリーヌ・ドヌーヴ。オープニング作品『The Midwife』。◆フランス映画の最新作情報: ミア=ハンセン=ラヴ監督『未来よ、こんにちは』(*L'Avenir*, 2016)、フィリップ・ガレル監督『パリ、恋人たちの影』(*L'ombre des femmes*, 2015)。

会員紹介

輪中（わじゅう）から奈良へ

吉野 道世（よしの みちよ）

私が奈良に住むようになって 4 年、日仏協会に入会させていただいて 3 年になります。それまで、奈良は私にとっては地縁も血縁もなく、修学旅行で昔やってきた時のかすかな思い出があるだけでした。

夫の定年を機にのんびり田舎暮らしでもと考えて、木曽三川国営公園の中にある古家に戻ってきました。村の人々は 60 年ぶりに空家が一軒うまったといっってよろこんでくれましたが、この地域はいわゆる「輪中」と呼ばれている低湿地地帯です。大辞泉には「洪水から集落や耕地を守るため周囲を堤防で囲んだ地域、またその共同体制をもつ村組織、江戸時代に発達した」と書いてあります。文化人類学者の友人によれば、堤防に囲まれて外界と遮断されているので江戸時代の組織や人間関係がよく残っているため、フィールドワークにはもってこいのところだそうです。たしかに明治どころか江戸時代の農村のしきたりがまだ残っているようなところ。春には一面菜の花畑に囲まれ、「菜花の里」といわれたり、ヨーロッパの低湿地国オランダと似ているということでオランダ風の風車をつくったり、チューリップを栽培したり、一見のんびりした田園風景が広がっていますが、自家用車が普及したため、公共の交通機関はすっかり忘れられてしまい、交通弱者の村の高齢者はこの陸の孤島にとりのこされて、不便で孤独な生活をしいられています。私達も高齢者といわれるようになり車の運転をあきらめることにしました。なかなか勇気のいることでしたが。と同時に、この輪中を出ることにしました。

その頃、終の棲家をさがしていた友人のすすめがきっかけで、奈良の施設を見学にきました。そのとき、窓の外にみた桜の花の美しさは忘れられません。さすがに奈良の桜はちがうとしみじみ眺めました。後日、友人に「あなたは桜の花にみとれて入居をきめたの。そんなきめかたもあるのね」と、あきれられました。奈良に来たいと思ったのは、やっぱりあの時、しんと咲いていた桜のせいだったのではないかと、今も思ったりします。桜の季節がくるたびに、やっぱり奈良の桜は違うと感激します。

もう一つ奈良に来てよかったなあと思うことがあります。それは奈良日仏協会との出会いです。おかげであまりなじみのなかった様々なフランス文化にふれることができ、友人も知人もなかったこの地で淋しい思いをすることもなく退屈をすることもなく、過ごして行くことができました。この 1 月からは、三野先生の「学び直しのフランス語」の教室に通うことができ、お仲間の方々と楽しい時間を過ごすことができるようになりました。「本当に奈良に来てよかった」という思いで一杯です。先日、米寿の祝いで娘が台湾旅行をプレゼントしてくれました。これからも元気でフランス語が学べますようにと願いをこめて、台湾の人々と一緒に旧正月の天燈節に天燈（ランタン）をあげてきました。天燈は天高く上がってゆきました（右写真）。



「絹谷幸二ギャラリートーク」開催

南城 守（なんじょう まもる）



2016 年 12 月 23 日、大阪梅田のスカイビル 27 階に開館した奈良出身のアフレスコ画家、絹谷幸二さんの天空美術館。去る 2017 年 3 月 5 日、天空美術館主催で絹谷幸二ギャラリートークが開催されました。奈良日仏協会からは会員 8 名が参加。当日サプライズで建築家の安藤忠雄氏が登場し、絹谷幸二と安藤忠雄の対談が実現。世界を舞台に活躍する現代アーティスト同士による丁々発止、かつ互いを尊重し合うやり取りに、約 300 名の観衆が魅了されました。文化・芸術から社会情勢、そして健康にいたるまで、話題は尽きず、「建築」「絵画」「彫刻」と天才達がしのぎを削った偉大なるイタリア・ルネッサンス時代を彷彿とさせる芸術談義は、まさに人間の表現の無限の可能性を教えてくれるものだったといえるでしょう。

これからも、奈良日仏協会「美術部門」として、鑑賞会・講演会・発表会などを取り入れた活発な活動を目指して行きたいと思ひます。ご期待ください！

第 135 回 フランス・アラカルト「美女と野獣 騎士と精霊—文学に見る異形の愛」

- ❖ 日時：2017 年 5 月 22 日（月）14:30～16:30
 ❖ 会場：生駒市セイセイビル 4 階 401 会議室（近鉄生駒駅南へ徒歩 2 分）
 ❖ 定員：45 名（要予約、申込先着順）一般受付は 5 月 1 日から開始
 ❖ 会費：会員 100 円 一般 500 円（会場費および資料代）
 ❖ 問い合わせと申込先：tetsu11-kyo13@docomo.ne.jp 又は tel：0743-76-7617（高松）
 ❖ 講師：三野博司さん（略歴）放送大学特任教授・奈良学習センター所長、奈良女子大学名誉教授、クレルモン＝フェラン大学文学博士、国際カミュ学会副会長（日本カミュ研究会会長）、奈良日仏協会会長。主著に *Le Silence dans l'œuvre d'Albert Camus* 『カミュを読む』『星の王子さま事典』『リュミエール フランス語文法』などがある。
 ❖ 講師からのメッセージ：恋をするのは人間同士とは限りません。物語の世界では、人間と人間ならぬ異形の生き物とのあいだの恋もまた生まれます。野獣が美女に恋をし、騎士が精霊に心を奪われるのです。取り上げる作品は、『クーピードーとプシケー』『美女と野獣』『蛙の王子さま』『ノートルダム・ド・パリ』『シラノ・ド・ベルジュラック』『ウンディーネ』『オンディーヌ』『人魚姫』『ペレアスとメリザンド』『夕鶴』などです。
 （写真は Mme Beaumont, *La Belle et la Bête*）



坂本利文さん出演の「古楽器コンサート」他の案内

1) 古楽器コンサート Vol.3 「町家で楽しむ古楽の世界」

- ◆ 日時：5 月 14 日（日）13:30 開場 14:00 開演 ◆ 会場：奈良町にぎわいの家（近鉄奈良駅から南へ徒歩 15 分）
 ◆ 演奏者：SAKAMOTO 古楽コンサート（ヴィオール他：坂本利文、リコーダー他：坂本洋子）
 ◆ 演奏曲目：作者不詳 王のエスタンピー、T・ヒューム 兵士の行進、作者不詳 グリーンスリーブスによる変奏曲、他
 ◆ 入場料：500 円 定員 40 名（要予約）◆ 予約と問合せ：Tel. 0742-20-1917（奈良町にぎわいの家）nigiwainoie@gmail.com
 2) オルティスコンサート第 27 回定期演奏会「単声から多声へ～ガンバコンサートへの道」
 ◆ 日時：5 月 26 日（日）18:30 開場 19:00 開演 ◆ 会場：カトリック奈良教会（近鉄奈良駅から北へ徒歩 2 分）
 ◆ 演奏者：オルティスコンサート（ヴィオール：坂本利文、橋詰玲子、中西 歩、上田牧子、リコーダー：坂本洋子）
 ◆ 演奏曲目：V. ガリレイ：ファンタジア、E. デュ・コーロワ：ファンタジー、C. タイ：インノミネ、J. フンク：サラバンド、他 ◆ 入場料：前売り 3000 円 当日 3500 円 学生 2000 円
 ◆ 予約と問合せ：Tel. 0742-22-5105（坂本）s-kogaku@m4.kcn.ne.jp

《2017 年度第 1 回理事会報告》

…事務局

日時：2017 年 3 月 16 日（木）15:00～17:00
 場所：放送大学奈良学習センター Z306 号室
 出席者：三野、野島、浅井、井田、中辻、高松、三木、杉谷
 議題 1. 2017 年度暫定会員 90 名。
 議題 2. 1/19 理事会後の活動 (2/11) 総会・懇親会、(2/21) ボネル総領事との面談、(2/26) 第 43 回日仏シネクラブ例会、(3/9) 第 134 回フランス・アラカルト。議題 3. 今後の行事 (5/22) 第 135 回フランス・アラカルト「美女と野獣 騎士と精霊」(6/25) 第 44 回日仏シネクラブ例会『夢を見ましょう』(9/16) ガイドクラブ勉強会 (10/14) ガイドクラブ散策「大神神社」。議題 4. Mon Nara 議題 5. その他 HP の更新状況、協会創立 25 周年行事積立金別口座作成。
 次回理事会：5 月 18 日（木）15:00～

会員通信

- ★6 月 9 日（金）18 時 30 分～『プレジール・ド・ラ・シャンソン』ベコー主催、連絡先 090-9614-6477（中辻）
 ★6 月 30 日（金）19 時～『フランス語で歌うシャンソン』日本テレマン協会主催、連絡先 090-9614-6477（中辻）



編集後記 ☆「リラ」(lila) の花咲く頃となりました。原産はバルカン地方。和名「ムラサキハシドイ」(紫丁香花) の近縁の植物もありますが、日本には明治中期にもたらされたようです。北海道では 5～6 月に咲き、札幌市の木として知られています。☆ヨーロッパでは 16 世紀、神聖ローマ帝国大使で薬草学者でもあったオージェ・ギスラン・ド・プスベックがオスマン帝国（現在のイスタンブールが首都）に赴任して持ち帰り、フランス旅行の折にフランソワ一世に贈ったとされています。☆リラの花がフランスの庭園に欠かせない花となるのはそれから 300 年後の 19 世紀。東方の異国情緒を喚起させる花として、その色・形や香りが愛でられるようになります。☆ブルーストは『失われた時を求めて』のなかでリラの花を「フランス庭園のなかにベルシャの細密画を想わせる鮮やかで混じりけのない色調を残すこのイスラムの若い天上の美女」などと喩えています。☆言葉の持つ力に敏感なセルジュ・ゲンズブールは、花ではなくバリの地区名からメトロの駅名に入った「リラ」を、デビュー曲「リラ門の切符切り」(Le poinçonneur des Lilas, 1958) で、独自の世界を創りだしています。(N. Asai)

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
 ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、ホットなフランス情報などを歓迎します。誌面の都合で意味を極力変えずに表現を変えさせていただくことがあります。次号は **5 月 31 日** が原稿締切日です。

Mon Nara

mars-avril 2017 **3-4 月** 合併号 numéro280

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP: <http://www.afjn.jp> E-mail: nara.afjn@gmail.com FAX: 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司